

## まとめと考察

---



## まとめと考察

まずは、3 調査を通して明らかになったことをまとめたい。

- ① 母親がスポーツ活動への関与に対して抱く負担感には、年収などの家庭状況による差がみられる。
- ② 子供がスポーツ活動をしていない場合、母親は当番や役員に対する抵抗感が特に強く、その「わずらわしさ」を回避するため、参加を前向きに検討できずにいる。
- ③ 現在熱心に関与している母親は、自分の子供の成長だけでなく、母親自身や家族の楽しみ、さらにまわりの子の成長も楽しめることが、やりがいにつながっている。
- ④ 熱心にみえる母親にも葛藤があり、家族やチーム、チームを取り巻く環境に支えられて、子供たちがスポーツ活動に参加できる条件がそろっている。

母親がスポーツ活動の支援を負担に感じるということは、家庭の経済状況や保護者の生活状況に左右される問題であり、社会課題として捉えられる。子供にとってのスポーツ活動機会に関わる課題でもあり、長い間母親が担ってきた役割や今後のスポーツ活動の支え手をどのように捉えていくかという問題にもつながる。

最後に、保護者の状況にかかわらず小学生が希望するスポーツができるためには何が必要なのか、当事者や周囲の人々にできることは何かを考察する。

### 1) 当事者（母親）にできること

1 章のインターネット調査の図表 1-24(p29)にあるように、また、2 章の母親に対するグループインタビューのⅡ-1-1 にもあるように、スポーツ活動をしていない母親の間で、保護者役割に対するマイナスイメージは相当に大きいものであった。家庭内の多くの役割が母親に任せられる実情に加え、スポーツ活動における周辺的な役割が長年母親に課されてきた事実は、当事者たちが一番よく知るところである。しかし、3 章の事例のような、保護者の負担が少ないクラブが存在する地域もある。また、2 章 I-4-3 や 3 章の事例でみたように、保護者の役割は、母親どうしの工夫や指導者との関係性のなかで変化させることもできる。チームへの参加が難しければ、スポーツに親しむきっかけとして、図表 1-26(p31)にあるような地域の公共施設を利用したり、体験イベントに参加したりすることもできる。

とはいえ、母親個人にできることには限界がある。桜井(2017)が指摘する「さまざまな配慮をできる限り完璧にしなければという母役割プレッシャー」をこれ以上強調することなく、子供が希望すればスポーツ活動に参加できる状態をかなえるには、スポーツ活動の環境そのものを見直すことが重要であろう。

### 2) 地域のスポーツ関係者（行政、体育協会、クラブ）にできること

クラブにおいては、3 章の事例のように「できないことを助け合う」運営方針を立てることで、親子が参加しやすい環境をつくることができる。父親や若手の指導者、OB・OGなどが、従来母親が担ってきた役割を可能な範囲で引き受けたり、係や当番のあり方を現状に合わせて見直したりすることもできるだろう。また、子供の意思や志向、家族のライフスタイルに合わせて、練習や試合への参加が柔軟に決められるクラブがあれば、多様な親子が参加を検討しやすくなる。

さらに、2章のⅡ-2-2からは、スポーツ活動に関する情報を得ることが難しいと感じている母親の存在も明らかになった。余裕のない家庭では、保護者どうしで情報交換する機会も少ない可能性がある。ただし、限られたスタッフ・予算で活動する個々のクラブが皆、充実した Web サイトを作成することは難しいだろう。スポーツ少年団やその他の地域クラブの多くは、公共施設や学校を活動場所として利用している。市区町村の体育協会やスポーツ担当課が、そうした場で活動するクラブの実態を把握・集約して公開することで、より多くの保護者に情報が届くようになるのではないだろうか。

クラブの情報だけではなく、図 1-26 (p31)からは、子供がスポーツ活動をしていない場合は地域の施設やイベントにも縁がない家庭が多いと推察される。すなわち、そうした施設やイベントは、既にスポーツ活動をしている親子にとっては開かれた場所であるものの、そうでない親子にとっては敷居の高い場所になっている可能性がある。競技経験の少ない子供や普段スポーツに関わらない保護者でも気軽に出入りできる場や、体験イベントをきっかけに活動を継続できる場を、さらに充実させていくことが求められるだろう。

### 3) 研究者、社会にできること

一方で、保護者による言動がスポーツ指導の妨げになっている事実もある。たとえば村山・洪倉(2017)は、保護者の調査を通して「不平不満」「暴力的言動」「現場介入」といった問題行為があることを明らかにしている。こうした行為が現場にもたらす影響は深刻な問題として受け止める必要があるが、村山によると問題行為を起こすのはごく一部の保護者であるという。残念ながらこうした一部の親の言動が、時に強調されやすいのではないだろうか。

2章のグループインタビューでみたように、母親たちはさまざまな葛藤をしながら支援に励み、やりがいと負担感の間で揺れている。さらには、そうした場に行く余裕のない母親たちも多く存在する。長い間、「周辺の役割」を仕事のように引き受け、子供のスポーツ環境を支えてきたのは母親たちであるという事実は直視されるべきである。母親に当たり前のように課される「周辺の役割」の内容を見直すこと、母親以外の担い手を増やすことは、スポーツ活動に限らず子供が育つ環境全体の問題でもあり、当事者や現場の指導者・スタッフだけでなく、社会全体で検討できる課題であると考えられる。